

第4章 図書館網の計画

4-1 図書館計画の範囲

公共図書館の地域に対するサービス目標は、「誰でも、どこに住んでいても、どんな資料でも利用できる」ようにすることであると言われている。このような状態をつくっていくためには、一つだけの図書館がこの働きをするのではなく、地域中心館（中央館）とは別に、地域図書館（分館等）さらには移動図書館を配置し、地域中心館との間に密接なネットワークを組んで図書館サービス網全体でこの働きをするのである。そのための計画を立てることを図書館の地域計画という。

地域中心館（中央館）

市民の直接利用に応え、貸出とレファレンス・サービスを主な働きとする。図書館サービスシステムを統括・支援するセンターでもある。

地域図書館（分館等）

市民に対して直接的に資料の貸出を受持つサービス拠点として位置づけ、市民の日常生活圏内に設置する。資料は全て開架として常に新鮮な蔵書を供給して、市民の日常の利用に応える。

移動図書館（B.M.）

貸出サービス、予約サービスを行うものとし、人口密度が低く固定館が成立しないような地域に対してサービスステーションを設置する。

4-2 図書館サービス・ポイントの配置計画

(1) 図書館の利用圏域

計画地域に対して、人口分布状況を見ながら地域図書館（分館）の配置を行う。この問題を考えるには、一つの地域図書館がどのくらいの範囲からの市民を集め得るか、すなわち地域図書館の利用圏域はどのくらいの広さなのかを知る必要がある。

これまでの研究により、市民の図書館利用は図書館からの距離が遠くなるにつれて、急速に減少していくが、その減り方は同心円的な形ではなく、一般に市民の日常生活における通勤や買物動線を主軸にした卵型になる。このとき一定の値以上となる範囲を利用圏域とすれば、その範囲を示すことができる。

ここでは、市部における地域図書館を便宜上、開架規模に応じて小型館（開架冊数1万冊以上5万冊未満）、中型館（5～10万冊未満）、大型館（10万冊以上）の3つのタイプに分けることとする。[図4-1]はそれらの利用圏域モデル図を示したものである。

この徒歩・自転車などによる利用圏域モデルは、市民の日常の生活動線に対して、その途中に図書館がある場合には利用が高くなるが、日常の生活動線と反対方向に図書館がある場合には、距離的に近くてもなかなか図書館へ行かないことを物語っている。

(2) 設置計画への適用

前記において示した館外貸出者の利用圏域モデルを実際の設置計画に適用するには、卵型の形態の有効性の範囲について留意する必要がある。すなわち、分館の立地すべき一般の住宅地等では、住民の生活動線にはある方向に対して主要な流れが認められるのが普通であるから、前記卵型のモデルを基としてよいが、立地によっては生活動線が複数方向に均等分散することが予想される場合もある。

この度の図書館設置計画の予定地とされている福知山駅周辺では、JR線の高架開業に伴い、生活動線の流れに対して鉄道による地理的障害はほとんど認められなくなったと考えられる。このような場合モデル的には、生活動線は多方向に均等分散し同心円に近いものになると思われる。従ってここでは、[図4-1]に便宜的に円形に変換した利用圏域モデルを併せて示し、これを用いて計画を進めることとした。

(3) 地域の特性の把握

図書館は市民の日常生活の中で利便な位置になければならない。図書館の位置を定めるために、地理的条件をはじめ街の中心部との関係、なかでも、日常の生活動線すなわち道路の状況、バス路線など住民の動きに関するデータが重要となる。

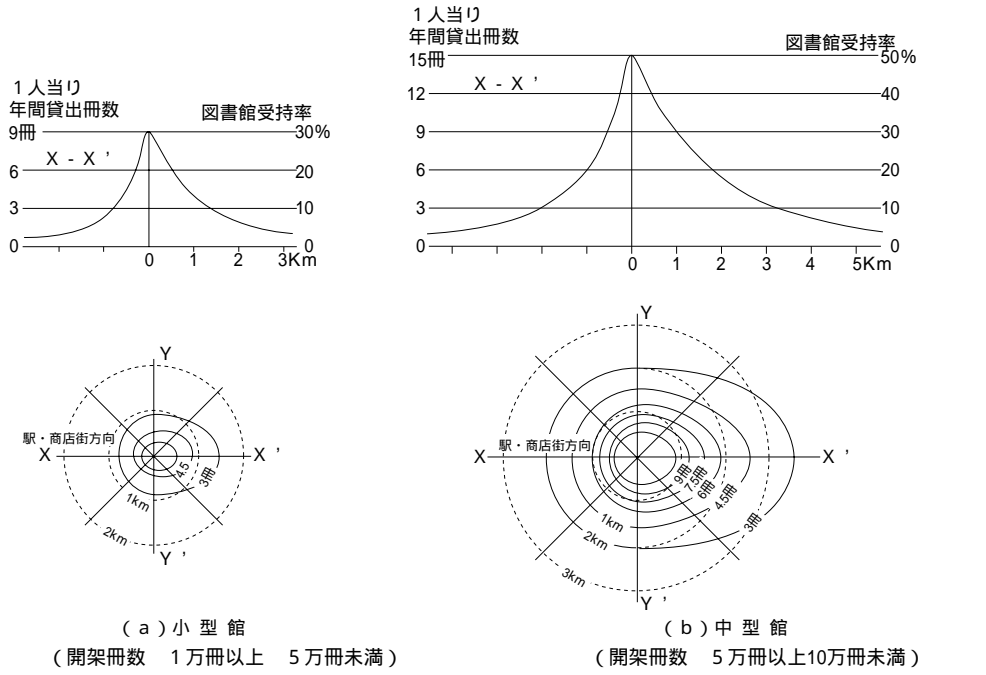
(4) サービス対象人口

人口とその構成は利用量を想定する基本的要素である。そのために、人口についての現況を知ることが必要となり、それらの将来についての見通しをもっておくことも不可欠である。この計画では、現在の人口について行政区別人口資料をもとに、人口100人単位で地図上にプロットし、分布図を作成した[図4-2]

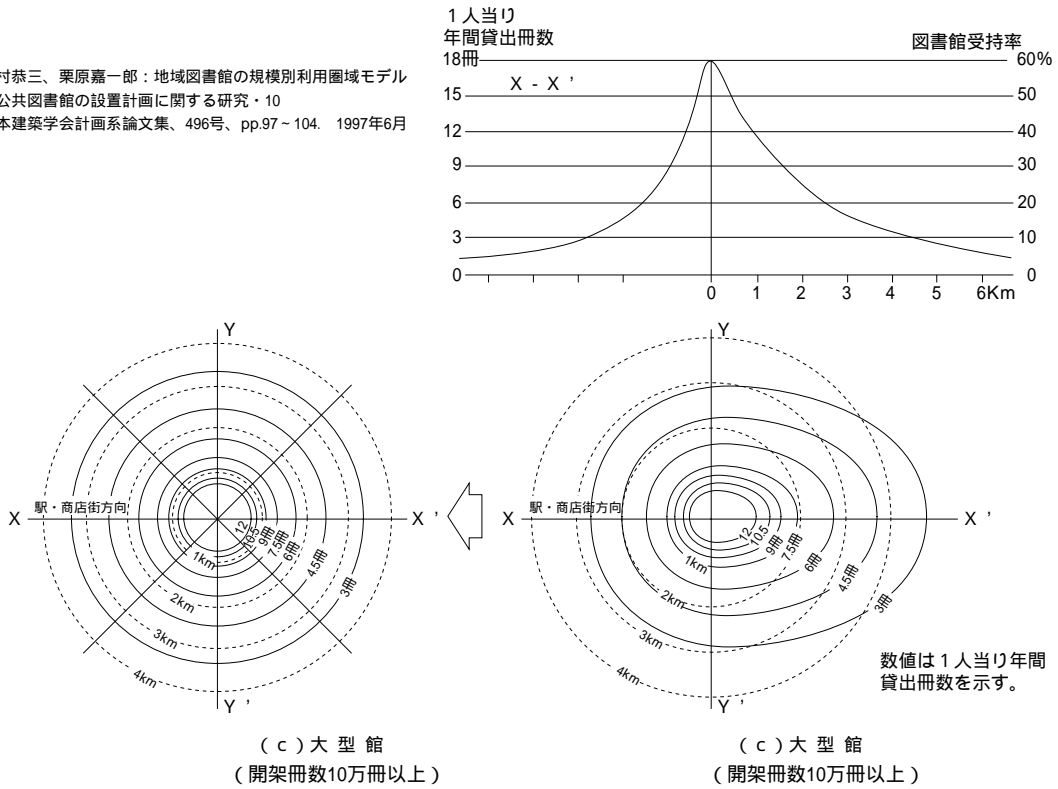
(5) 地域図書館(分館)の配置

地域図書館の配置に際しては、地域図書館の利用圏域モデルを用い、住民の大多数が地域図書館のサービス圏内に収まるように、必要数の図書館を設置しなければならない。1人当たり年間貸出冊数6冊(分館計画では3冊)の利用圏域で配置してみると、[図4-3]に示すようになる。

この中で、既存の三和、夜久野、大江分館については現在の立地を、計画図書館については、福知山駅周辺地区で構想されている(仮称)北近畿の都センター基本構想の内容を踏まえつつ、計画を進めるものとした。



中村恭三、栗原嘉一郎：地域図書館の規模別利用圏域モデル
公共図書館の設置計画に関する研究・10
日本建築学会計画系論文集、496号、pp.97～104、1997年6月

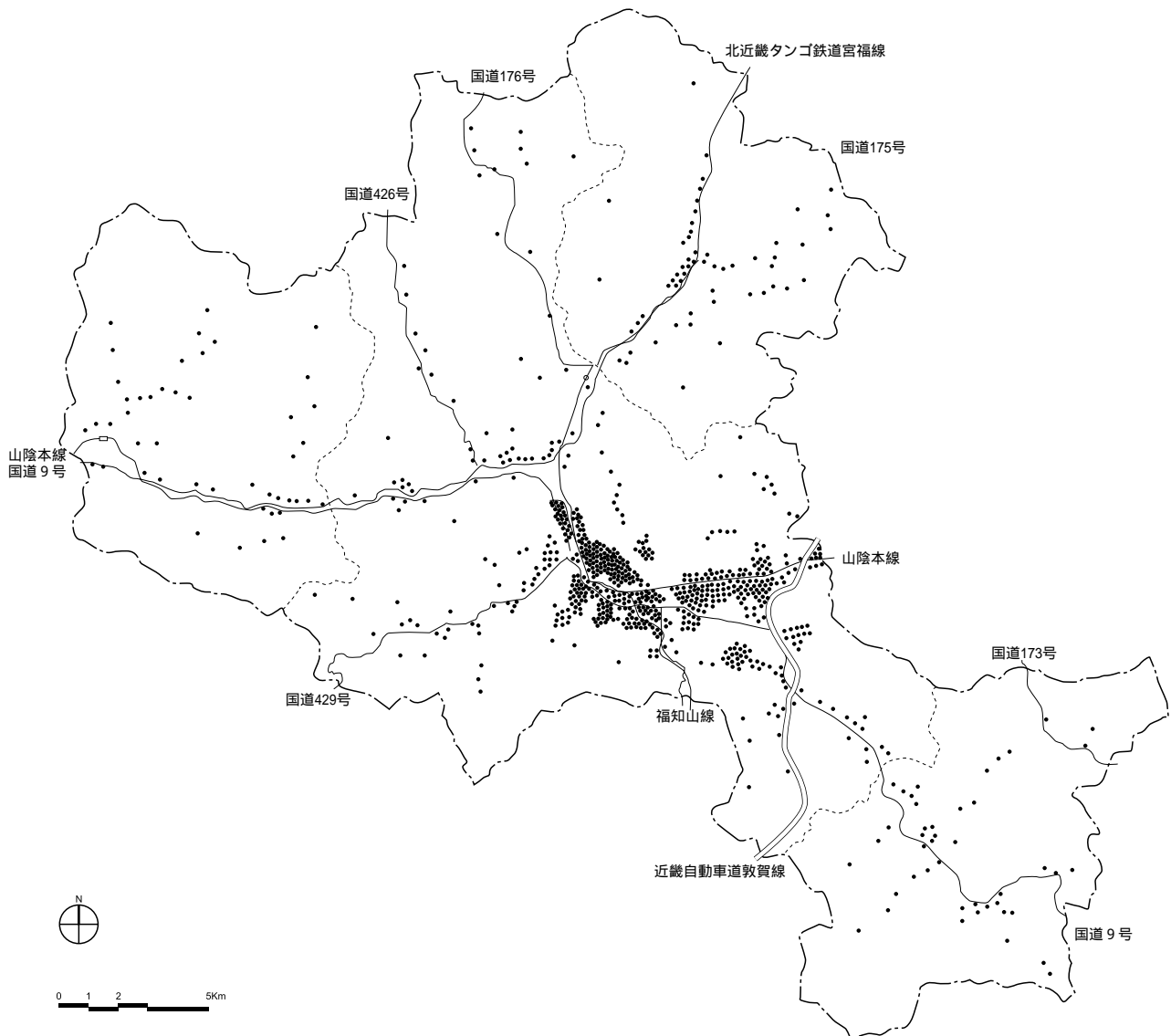


[図 4 - 1] 図書館の規模別利用圏域モデル図

凡 例

1点 100人

人口：83,575人
(平成18年3月末現)

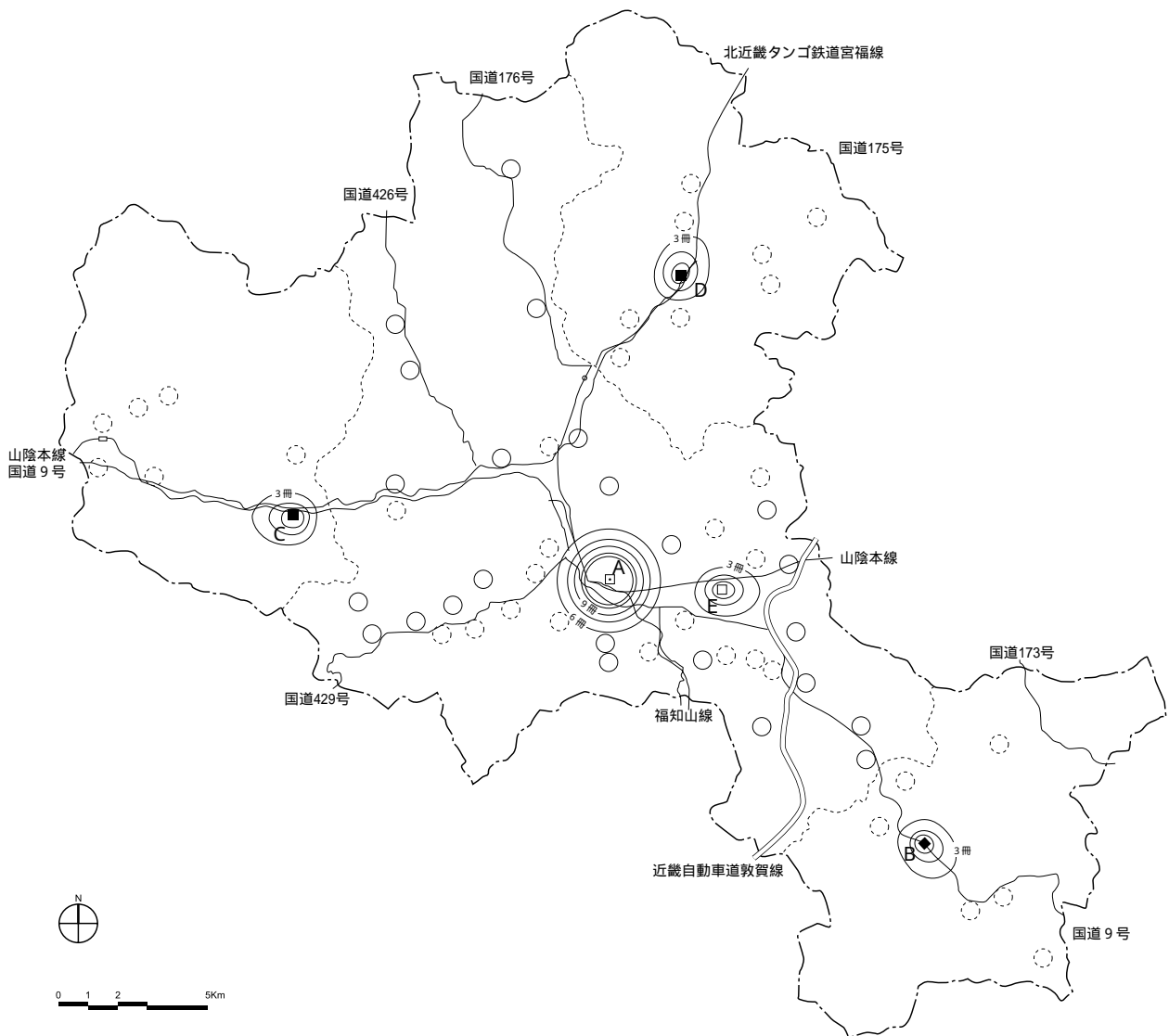


[図 4 - 2] 人口分布現況図

例

- 図書館（既存）
- 図書館（計画）
- 移動図書館利用圏域（既存）
- 移動図書館利用圏域（計画）

数値は1人当り年間貸出冊数を示す。



[図 4 - 3] 図書館網計画図

4-3 地域図書館（分館）の規模計画

個々の地域図書館の規模計画にあたっては、前記方法によって作成した配置計画図と人口分布図をベースにして、各館ごとに奉仕人口・必要蔵書数・年間受入冊数を算定する。

奉仕人口

人口（平成18年3月末）を83,575人として試算を行う。

貸出冊数の設定

当面の目標値として、住民1人当りの年間平均貸出冊数を6冊（分館では3冊）と設定する。

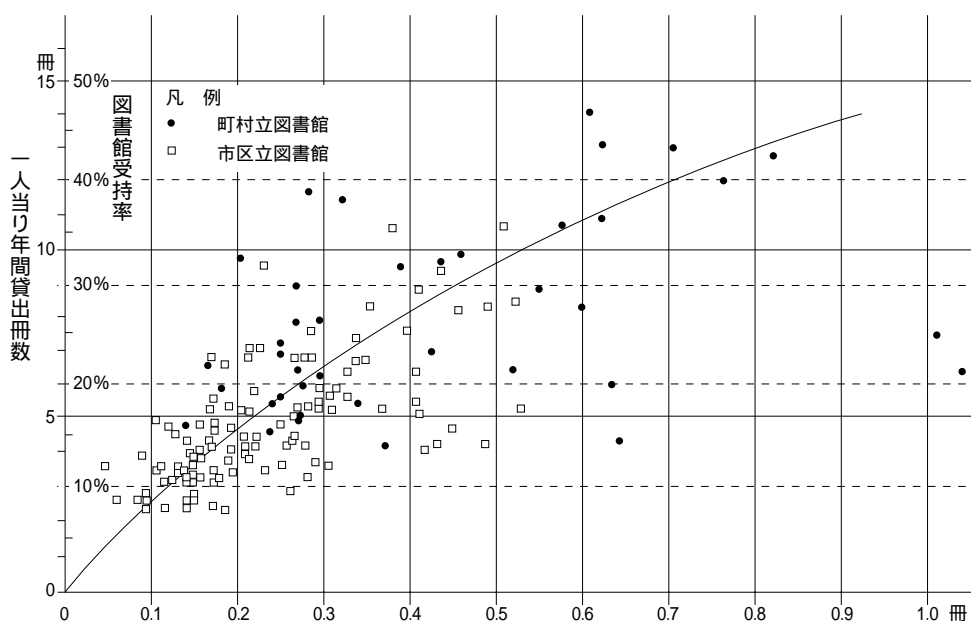
年間受入冊数

[図4-4]は公共図書館の個人貸出冊数実績のうち人口段階別の上位の自治体（計160）について、縦軸に1人当り年間貸出冊数を、横軸に1人当り受入冊数をとり、両者の関係を示したものである。

この図を用いて、1人当り年間貸出冊数を設定したときの1人当り受入冊数を求め、その数値を圏域内奉仕人口に乗ずることによって貸出用の必要年間受入冊数を算出するものとする。

平均配架年数

開架スペースに置く資料の平均寿命を7年とし、7倍を係数とする。以上のような前提にたつて、[図4-3]に示した図書館網計画想定図における個々の図書館について、蔵書規模を試算したものが[表4-1]である。



[図4-4] 蔵書規模算定図

中村恭三、栗原嘉一郎：地域図書館網の計画

公共図書館の設置計画に関する研究・11

日本建築学会計画系論文集、506号、pp.53～60、1998年4月

[表4-1] サービスの目標と規模計画

| 図書館名 | A | B | C | D | E | 計 |
|---------------|--------|----------|----------|----------|-------|---------|
| 計画奉仕人口(人) | 23,600 | 三和分館 | 夜久野分館 | 大江分館 | 7,600 | — |
| 目標年間貸出冊数(冊/人) | 6.0 | — | — | — | 3.0 | — |
| 1人当り受入冊数(冊) | 0.27 | — | — | — | 0.12 | — |
| 年間受入図書数(冊) | 6,370 | — | — | — | 910 | — |
| 平均配架年数(年) | 7 | — | — | — | 7 | — |
| 基本図書数(冊) 1) | 44,600 | (15,100) | (27,700) | (12,400) | 6,400 | 106,200 |
| 参考図書数(冊) 2) | 10,600 | — | — | — | 600 | 11,200 |
| 開架蔵書数合計(冊) | 55,200 | (15,100) | (27,700) | (12,400) | 7,000 | 117,400 |

注. 1) 図書館名B, C, D館の数値は、既設分館の蔵書数を示す。

2) 基本図書数の10%。ただし、A館を中央館とする場合には、市全体の基本図書数の10%とする。

4-4 移動図書館(B.M.)の計画

移動図書館の基本的な機能は、

ア. 人口密度が低くて地域図書館が成立しない地域の市民に対して図書館サービスを保障すること。

イ. 図書館網完成までの過渡的状态における、地域図書館の暫定的代替としての役割を果たすこと。

移動図書館については、次のような考え方で、サービス・ポイント(ステーション)を配置し、その上で移動図書館の必要台数および移動図書館用蔵書数を算定することとする。

ステーションの利用圏域

ステーションを中心にして半径250mとし、人口分布において2点(200人)以上の人口があるところは、全てこの利用圏域で覆うこととする。

移動図書館の巡回頻度

2週間に1回の周期で各ステーションを巡回するものとする。1台が1日に回るステーション数を3~4ヶ所、週5日稼働と仮定して、30~40ステーションごとに1台とする。移動図書館用蔵書規模については、1台当り積載冊数を1,500冊とした場合、積載冊数の10倍程度が必要であるものとして、移動図書館1台当り蔵書数を1.5万冊とする。

4-5 地域中心館(中央館)の計画

中央館は、多岐にわたる機能を持ち、福知山市の地域図書館ならびに移動図書館による図書館サービスを1つのシステムとして統括する。

(1) 地域中心館（中央館）の蔵書規模

分館としての必要蔵書数は、人口分布状況を基に、徒歩・自転車による利用圏域モデルを用いて [表4-1] において算出している。

中央館の必要蔵書数については、以下のように考えることとする。

開架図書（成人、児童、青少年、レファレンス）

住民の通勤・通学の生活動線は、福知山駅および市の中心部に集中する傾向がみられる。自家用車および路線バスによる全市的な利用者へのサービス拡大にも対応しうよう、分館用として算出された開架蔵書数の2倍程度を備えるものとする。

閉架図書

ア．既存蔵書（約16万冊）のうち、現図書館の開架容量（約11万冊）を除いたものについては、新中央館で保存する。

イ．5館分の年間受入冊数のうち、利用頻度の低くなったものを新中央館で保存する。

以上をまとめて、新中央館の蔵書は次のように配置されるものとする。

| | |
|---------------|----------|
| 成人図書 | 80,000冊 |
| 児童図書 | 15,000冊 |
| 青少年図書 | 5,000冊 |
| レファレンス用（参考）図書 | 10,000冊 |
| 閉架図書 | 160,000冊 |
| 移動図書館用図書（2台分） | 30,000冊 |
| 合 計 | 300,000冊 |

(2) 施設規模

上記の蔵書規模を有する新中央館の施設規模については、蔵書規模に対応する延面積の事例 [図2-3] を参照にしつつ、福知山市の都市規模と他市の先進事例などを総合的に勘案すれば、3,000m²程度が必要であると考えられる。